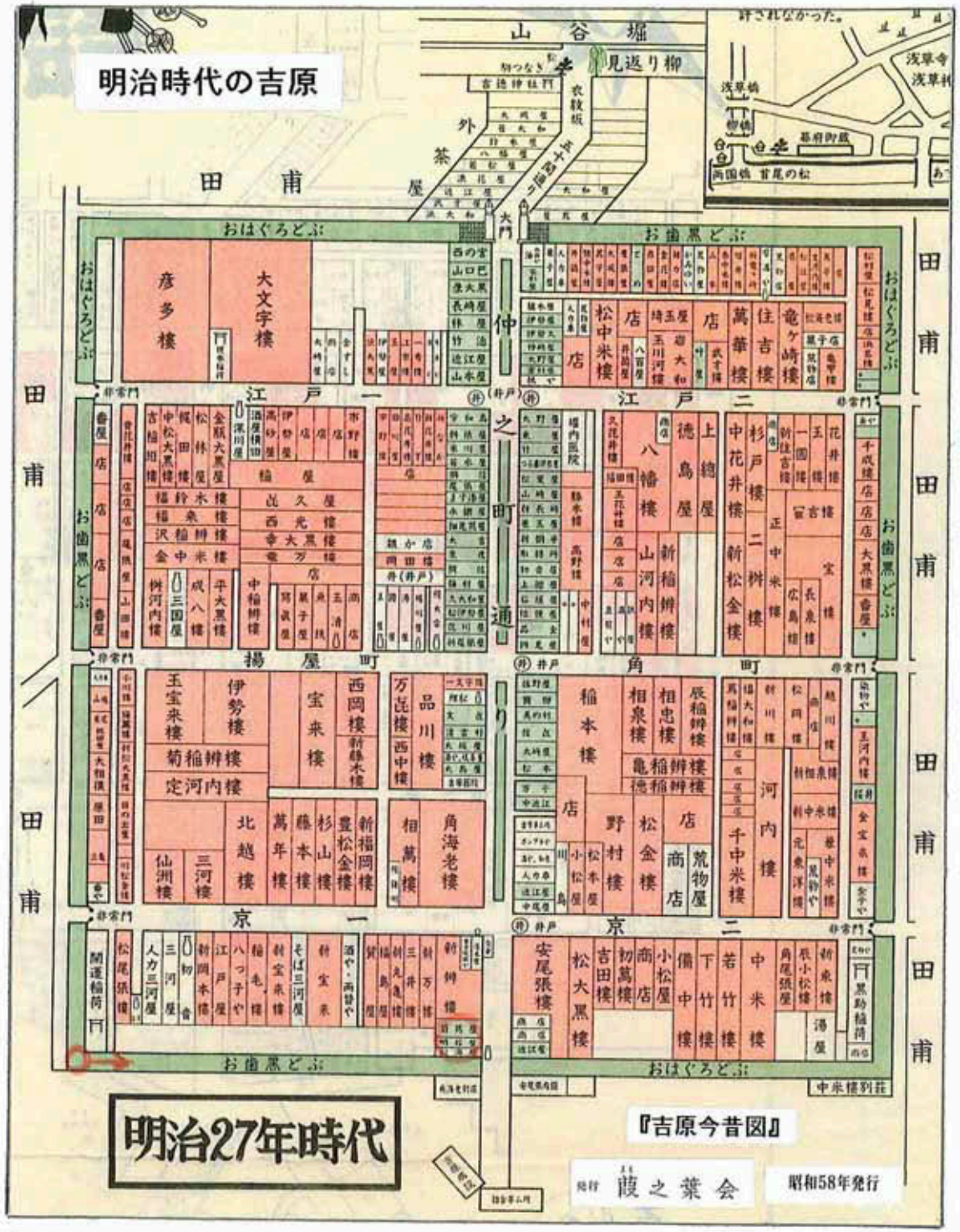


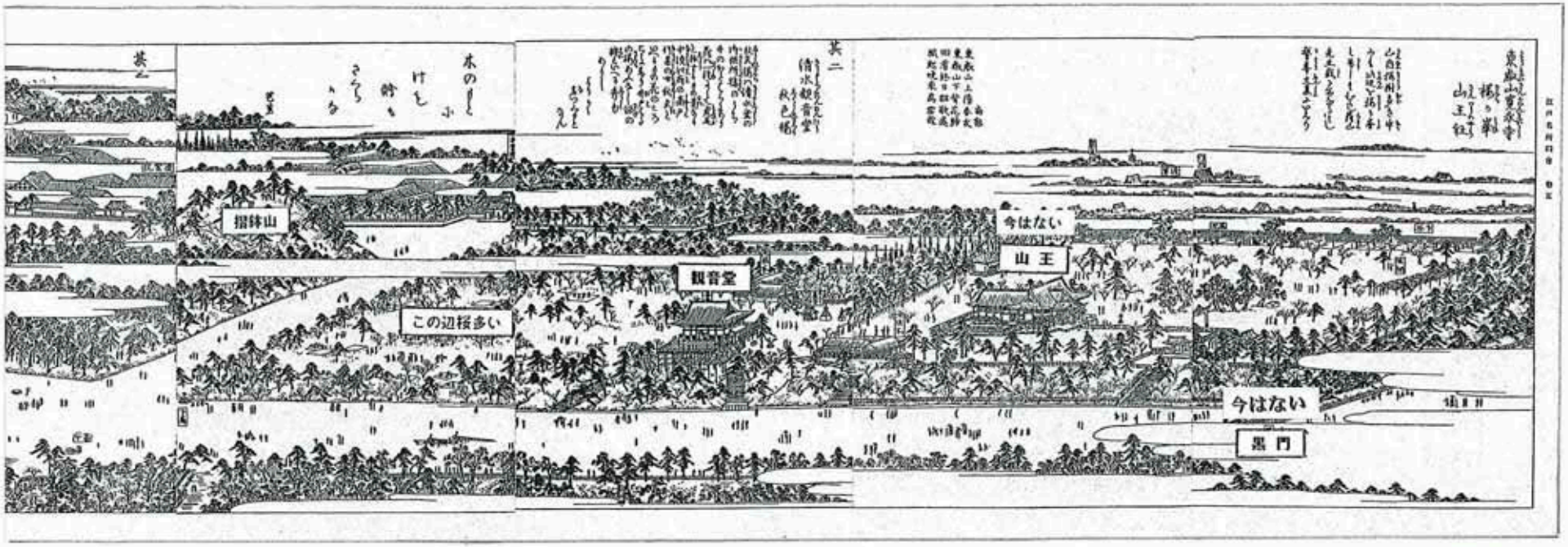
「八朔装」（はっさくのよそおい）の絵。家康入国の日を祝った８月１日に大夫達は白無垢の小袖を着て仲之町を歩いた。

左下の角から見た堀の跡。

48 東叡山 寛永寺

＝増上寺と並ぶ徳川家の大寺院＝

台東区上野公園



現在の寛永寺は明治１２年川越の喜多院の本地堂をここへ移した建物。元は元禄１２年（１６９８）今の噴水公園の所に創建されたが、幕末の彰義隊の戦争で焼失してしまいここへ移した。

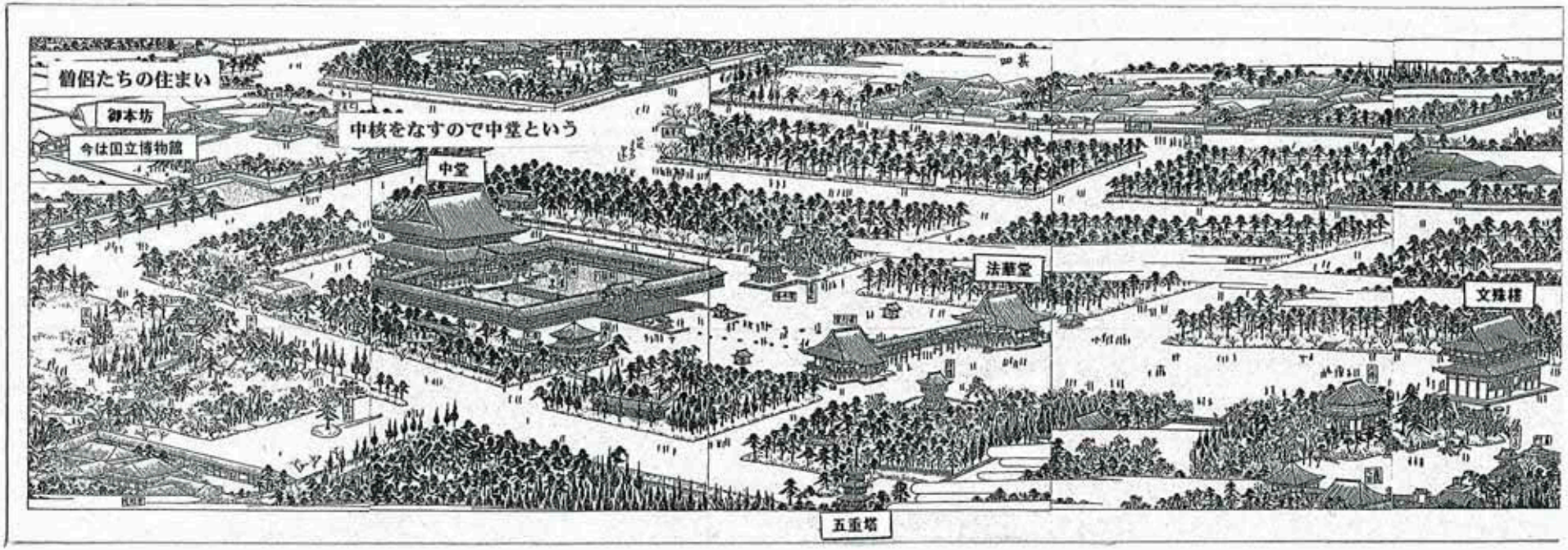
江戸城の鬼門（北東）の方向に寛永２年（１６２５）天海僧正によって建てられた。寛永年間に建てられたので寛永寺という。

歴代将軍の墓の入口門の葵紋。「東叡山」とは、東にある比叡山という意味。

江戸の頃の寺域の範囲。３０万５千坪あった。

東叡山寛永寺　圓頓院と號す。人皇百九代　後水尾帝の御宇、寛永年中、比叡山延暦寺に比せられ、江城の鬼門を護るの靈區として、慈眼大師草創有り。

抑　當山は江戸第一の櫻花の名勝にして、一山花にあらずと云ふ所なし。



歴代将軍６人の霊廟

８代将軍吉宗公の墓。今はここの塀が高くなってしまい写真は撮れない。寛永寺には１５人の将軍の内６人の将軍が祀られていて増上寺の６人と同じ数にしてある。

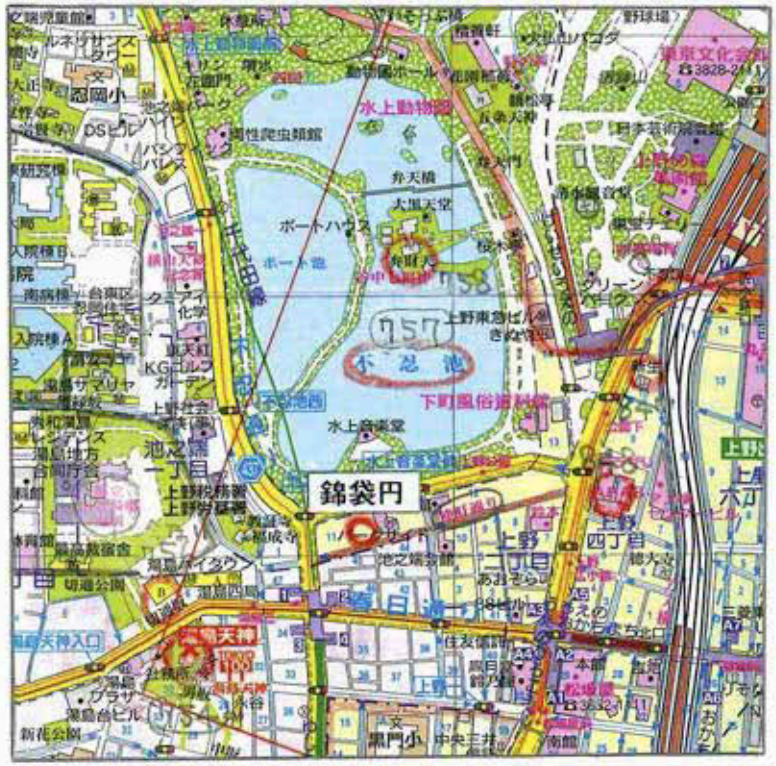
今の噴水公園の所に上の絵の「根本中堂」があった。

49 不忍池・錦袋円

＝古くは江戸湾の入江だった＝

台東区上野二丁目

「仲町通り」のパークサイドホテルと、登録有形文化財に指定されてる小川眼科のビル。この間の辺に「錦袋円」はあった。



池の西側より弁天島を見る

左頁上の絵の雰囲気で撮った写真。左奥は精養軒。

不忍池　不忍とは忍の岡に對しての名なり、殊に蓮多く、花の頃は紅白咲き亂れる。昔は離島にして、船にて往來せしを、寛文の末、陸より道を築きて、參詣の人に便あらしむ。

寛永2年（1625）天海僧正が琵琶湖に見立て弁財天を祀った。

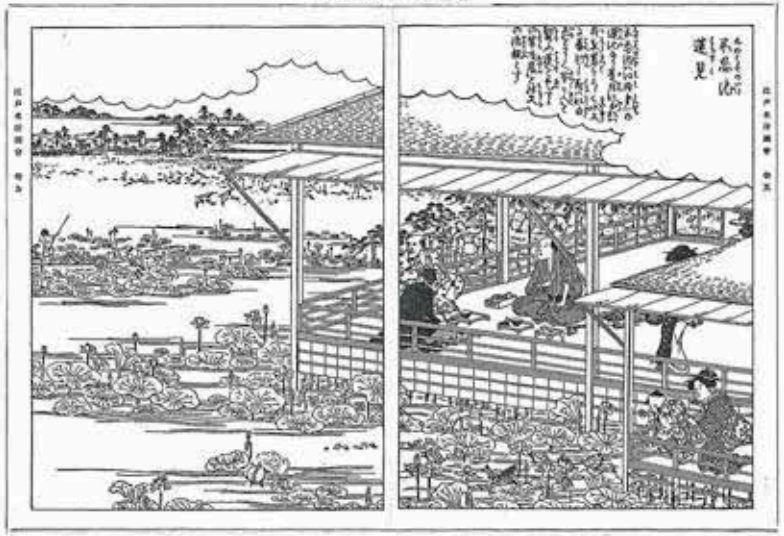
由緒書きが書かれている

錦袋円

＝旅の万能薬＝

正保3年（1646）創業。万病にきいたという有名薬局。
弥次・喜多も持参した。浅草寺の境内にも出店がある。

不忍池　蓮見



蓮を見ている絵。上の文には「不忍池は江戸第一の蓮池なり」とある。

(前圓袋錦及店菅煙田村)通町仲端之池　　池の端仲町１９番地

明治の頃の錦袋円。電柱に「芝大助」の字がある。
この店の主人の名は代々大助を名乗った。　『新撰東京名所圖會』

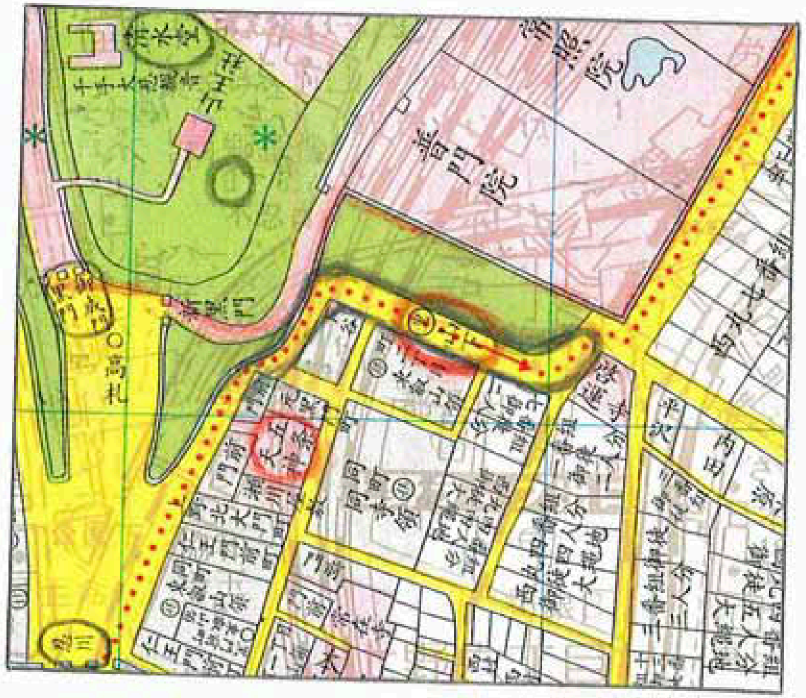
50 山下

（上野駅前から上野の山の下あたりをいう）

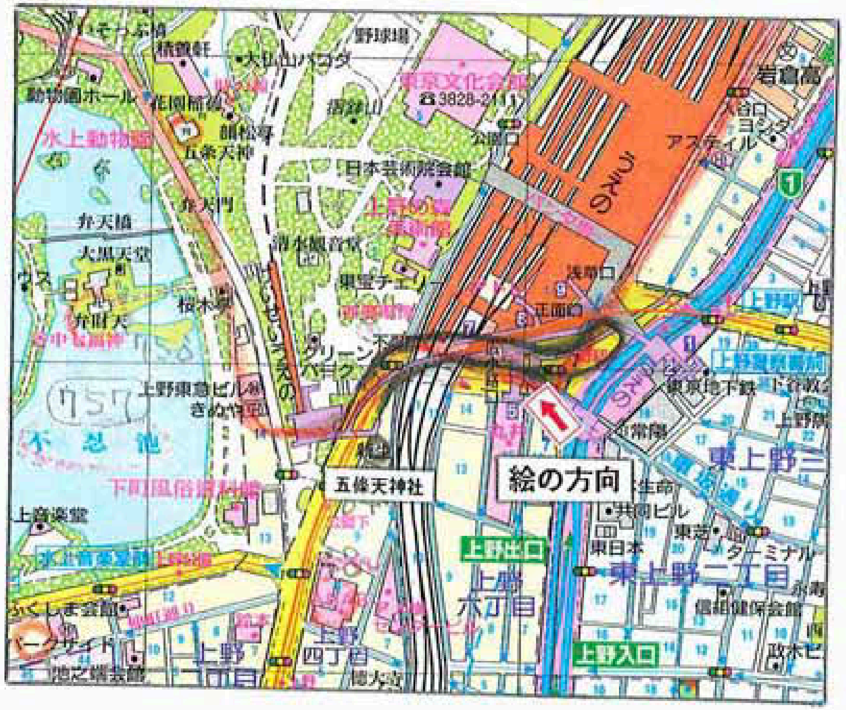
＝元文2年（1737）の大火のあと火除地として造られた広場＝

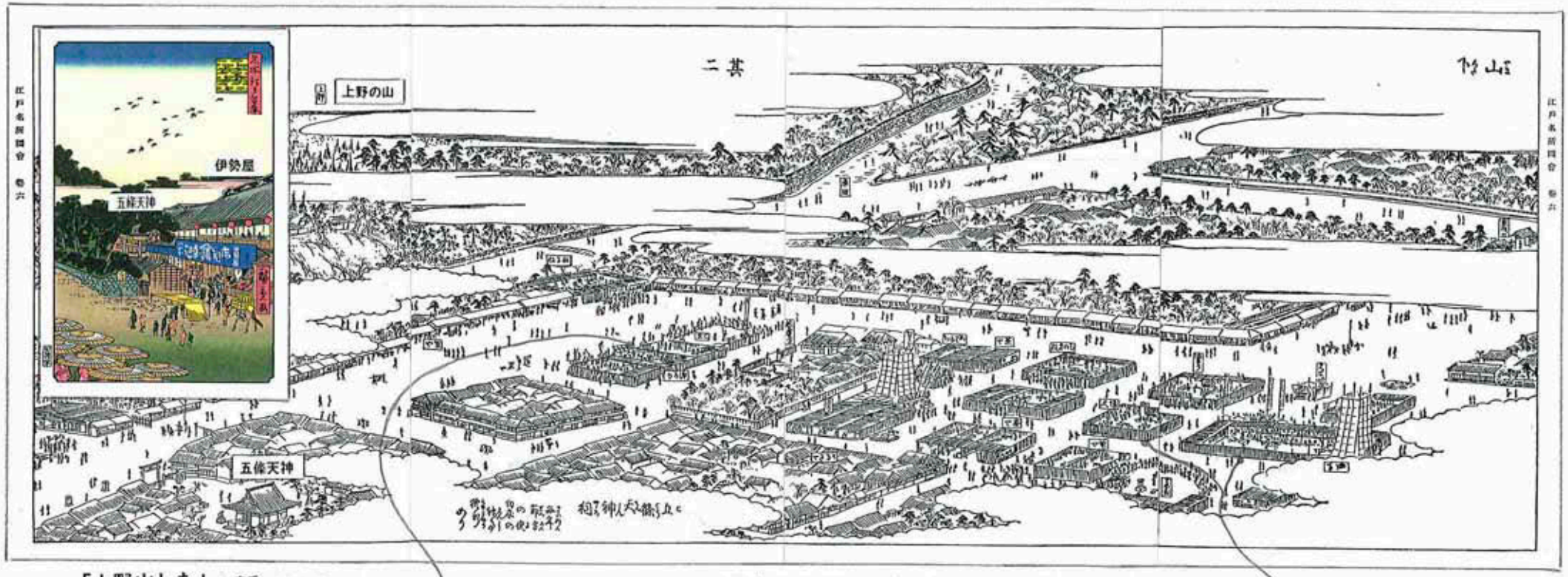
広小路と上野駅方面を見る

上野駅正面口からガード下の先までの範囲が「山下」



安政年間（1854～1860）の頃



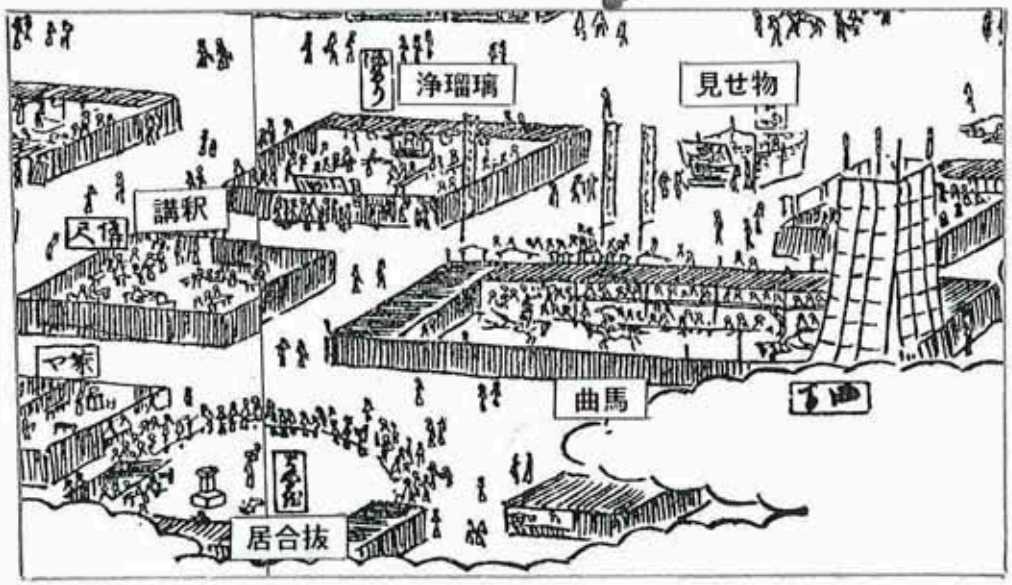


「上野山した」 広重

広小路の交差点から上野駅方面を見た絵で五條天神が見える。

広小路には多くの見世物小屋などが出来て大変賑わった。

曲独楽は松井源水かも知れない



曲馬には高い櫓が建っていて見物席が２階建になっている

《墨田区》

51 両国橋

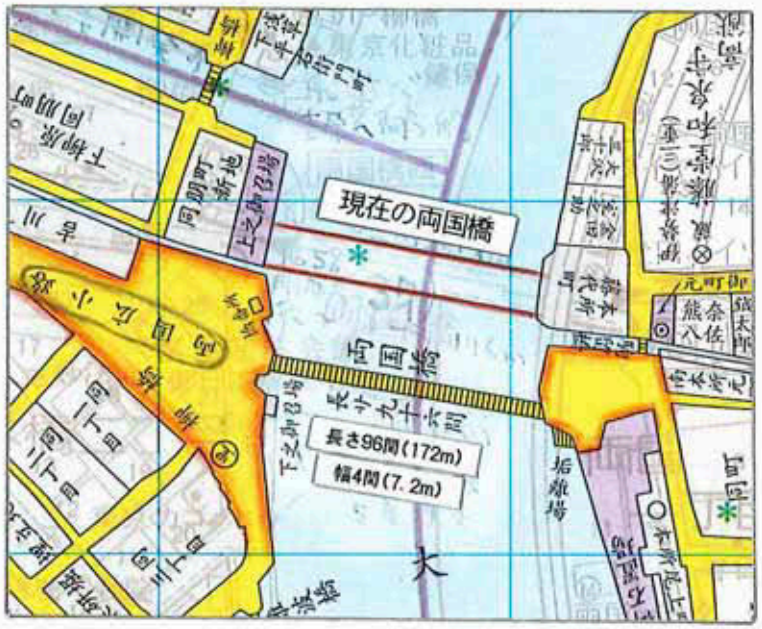
＝武蔵国と下総国を結ぶので両国橋という＝

中央区・墨田区

隅田川１３橋の１つ。今の橋は震災のあと昭和７年に改修された橋。
長さ１６４m、幅２４．５mある。千住大橋の次に古い橋。

神田川の柳橋方向から見た絵

広重『名所江戸百景』　安政5年（1858）夏



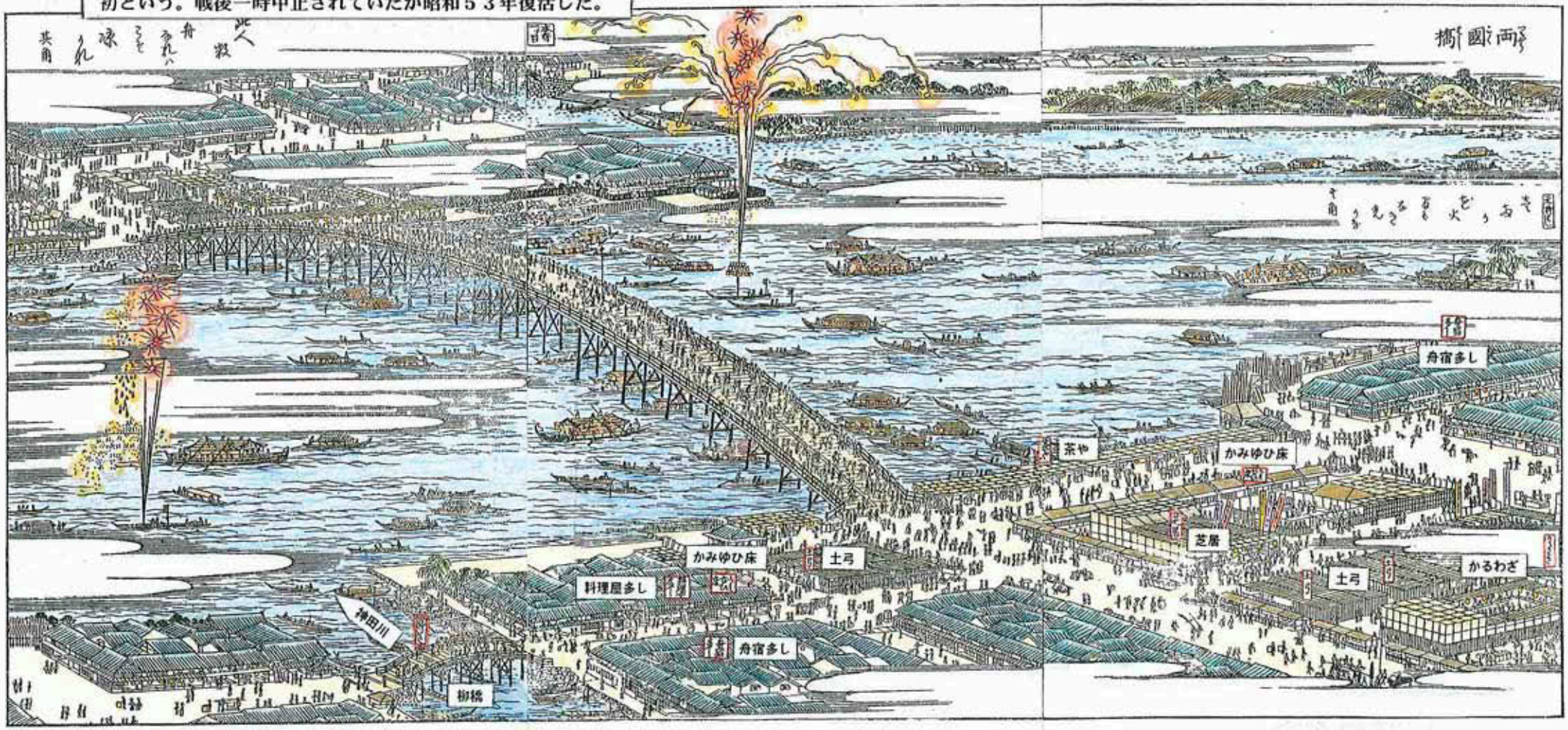
安政年間（1854～1860）

両國橋　淺草川の末、吉川町と本所元町の間に架す。長九十六間。橋の前後井橋上に掛屋を居て是を守らしむ。萬治二年己亥官府より始て是を造り給ふ。〔三橋記〕或は云ふ、寛文元年辛丑、新に両國橋を架けしめらる。

両国橋

川開きは、享保８年（１７２３）からで飢饉や悪病による死者の慰霊と厄払いを水神に祈願をして打ち上げられたのが最初という。戦後一時中止されていたが昭和５３年復活した。

明暦の大火（１６５７）のあと万治２年（１６５９）架けられた。火除地の広小路は見世物小屋等があり大変にぎわった。



橋の上から西側を見る

水茶屋が並んでいる

芝居小屋の入口

見世物小屋が並んでいる

『模型でみる江戸・東京の世界』

52 回向院

墨田区両国 二の八

＝多くの死者や無縁仏を葬った寺で「諸宗山無縁寺回向院」という＝

大正の震災で寺の配置が変わり本堂や仏像が移動した。

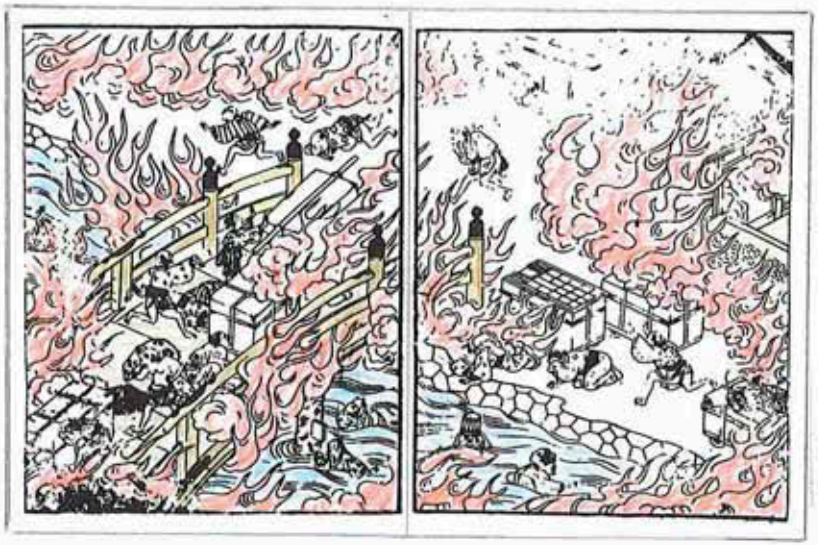
大火のあと延宝三年（1675）建立された死者の供養塔

今も絵と同じ位置に建っている。高さ3mある。

明暦1年～万治1年（1655～1658年）　江戸時代新聞

明暦の大火、江戸を焼き尽くす

江戸城本丸焼失、死者10万人を超える

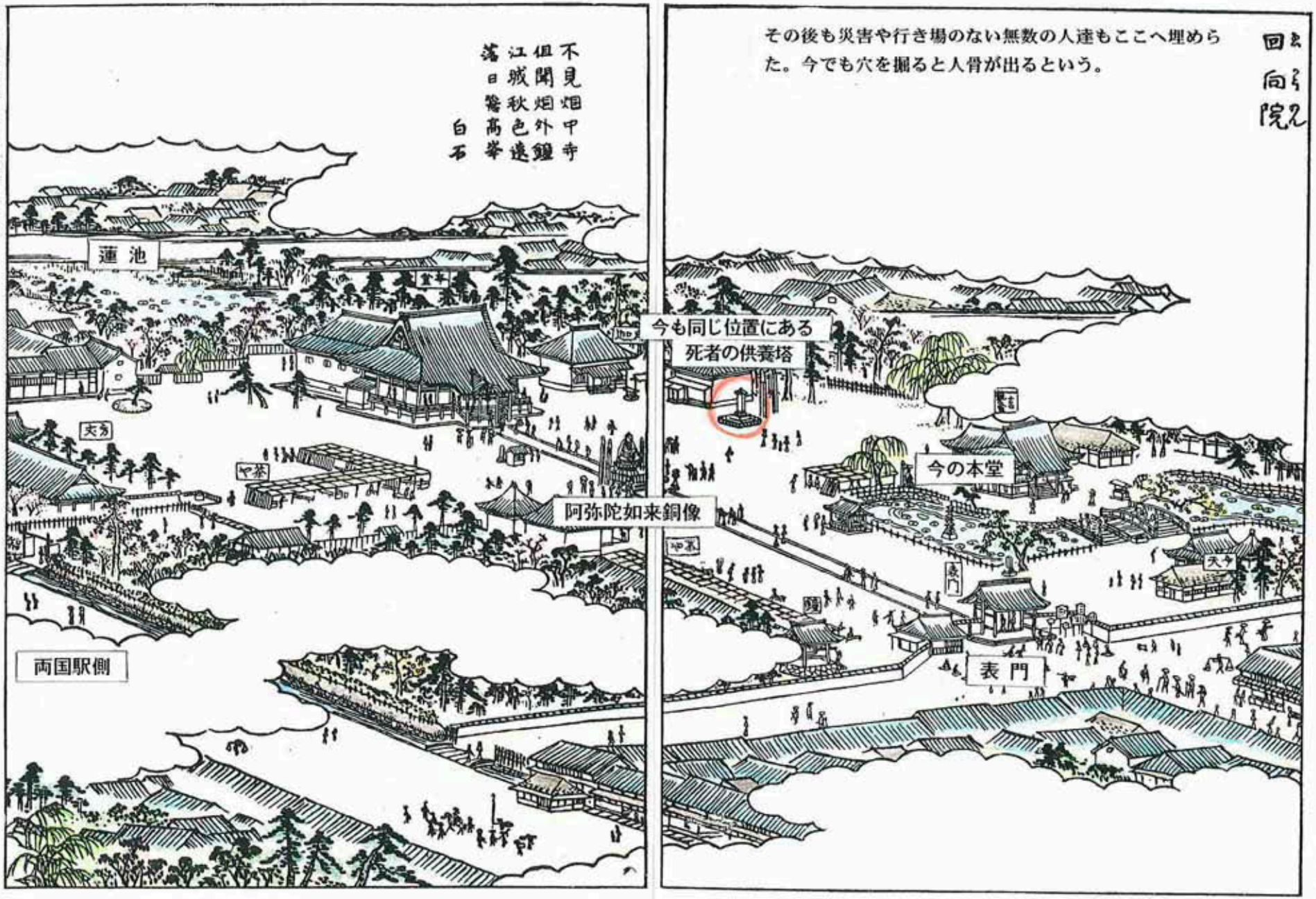


『むさしあぶみ』
延宝4年（1676）初版
浅井了意　著

『両国にぎわいMAP』

回向院

明暦3年（1657）1月18日の大火のあと10万人の死者を供養して建立された寺。江戸の6割が焼失した。



國豐山同向院　兩國橋の東詰にあり。

相傳ふ、明暦三年丁酉の春正月十八日・同十九日、大江戸大火に仍りて燒死する者、凡十萬八千餘人なり。時に台命ありて、此地を卜し、方六十許歩の地に伴の燒死骸を埋藏し、上に一堆の塚を築き、號けて漏澤園と唱ふ。

昔は諸宗山無縁寺といふとぞ。明暦大火の事實は（むさしあぶみ）といへる册子に見ゆ。

53 隅田川堤春景

墨田区堤通り一丁目

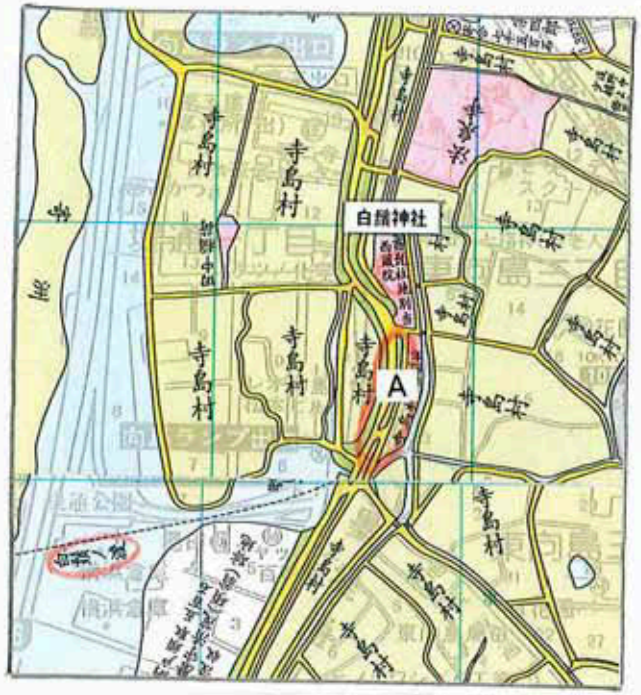
＝隅田川東岸の桜並木の堤の総称＝

A　昔の堤が残っている所。手前が白鬚神社で右側が川。

桜橋の少し下流の東側の堤。

絵の文章

「はる〳〵と霞わたれる隅田川の堤をうちミれハ、青柳の放髪も緑の眉、にほひやかにかきたれ苔る花のほころびそめて、ゑまひつくらふなんと立ましりたる、夕はえいとえむなり　わきて咲ミちぬる、ひとえたハたか挿頭にや手折らんとさすがに心のとまる木の本なりけらし」



江戸時代の周辺図

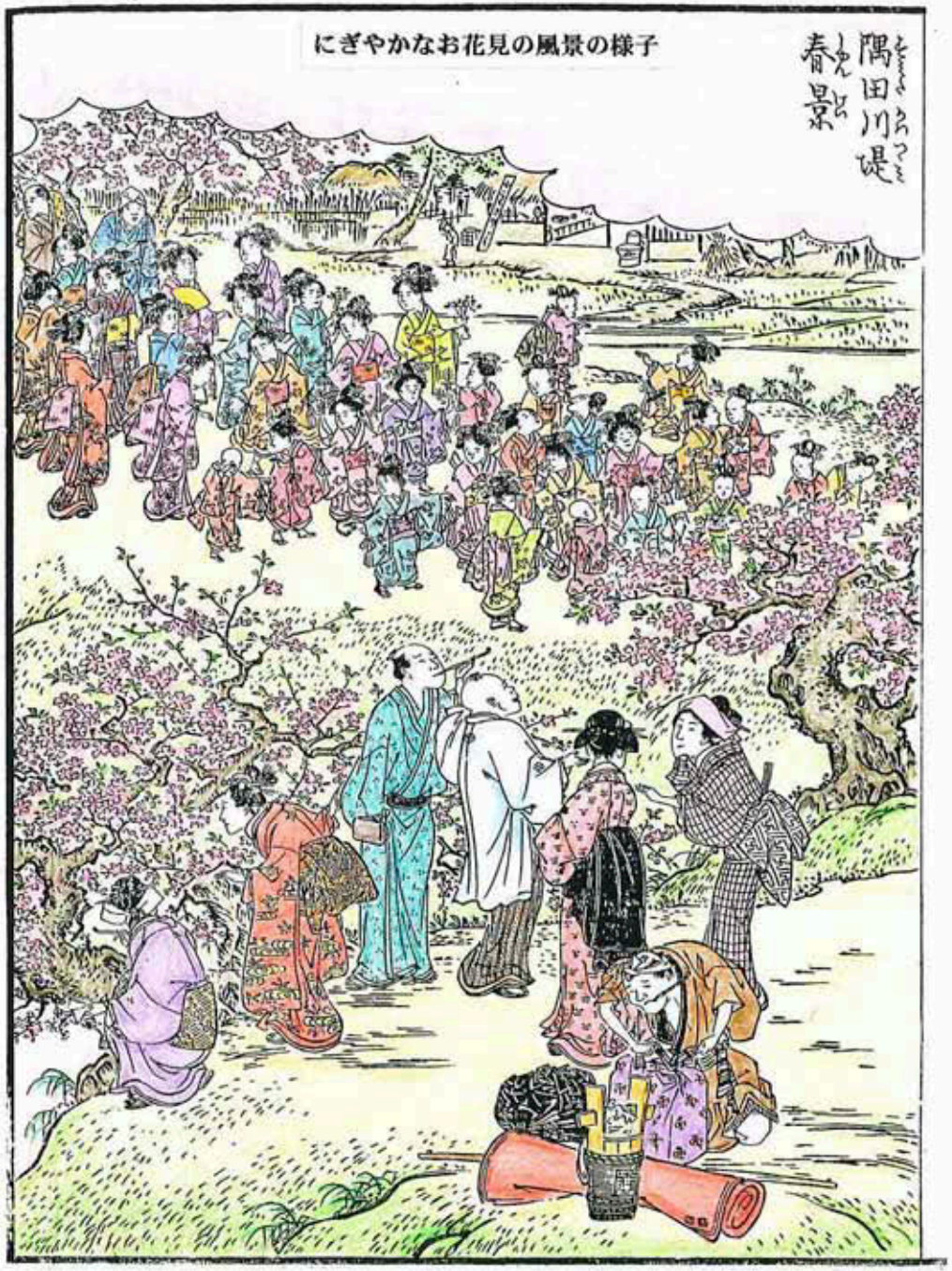
向島百花園

文化元年（１８０４）開園の古い庭園。戦災で焼失。昭和５３年史跡として指定された。

隅田川堤春景

桜の木が植えられたのは江戸初期からで、享保年間（１７１６～１７３６）８代将軍吉宗の頃にさらにふえ桜の名所となった。

隅田河堤　三圍稲荷の邊より、木母寺の際迄、堤の左右へ桃・櫻・柳の三樹を植ゑさせられければ、二月の末より彌生の末まで、紅紫翠白枝を交へ、さながら錦繡を晒すが如く、幽艶賞するに堪へたり。



54

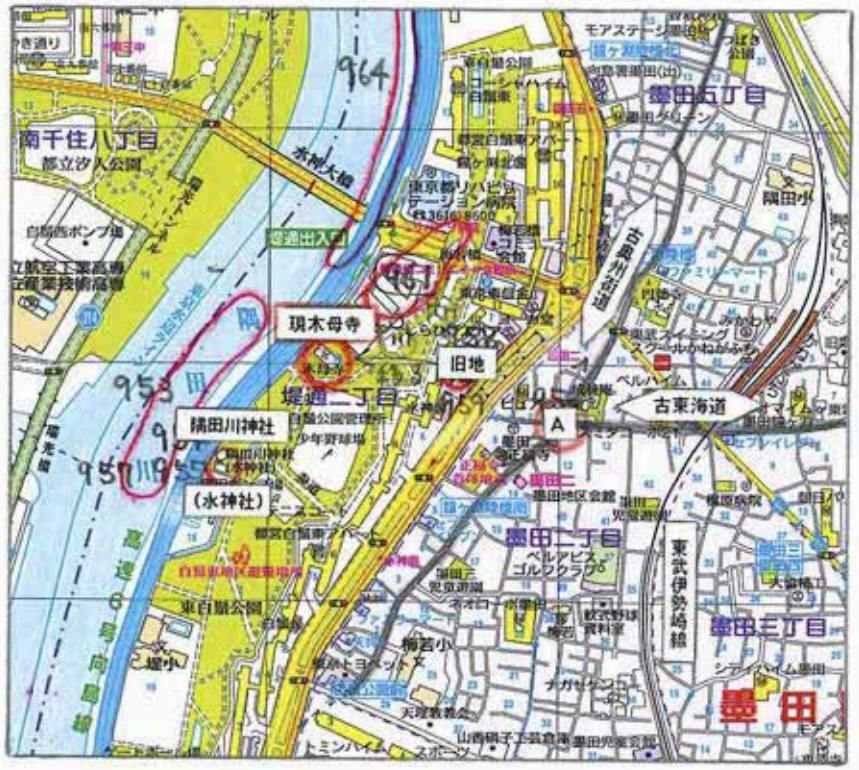
梅柳山 木母寺

墨田区堤通 二の十六の一

＝古奥州街道・古東海道・橋場の渡しなどの古代の交通の要地＝

木母寺本堂。昭和５１年今の所へ移る。

都営白鬚東住宅の最上階より撮影。

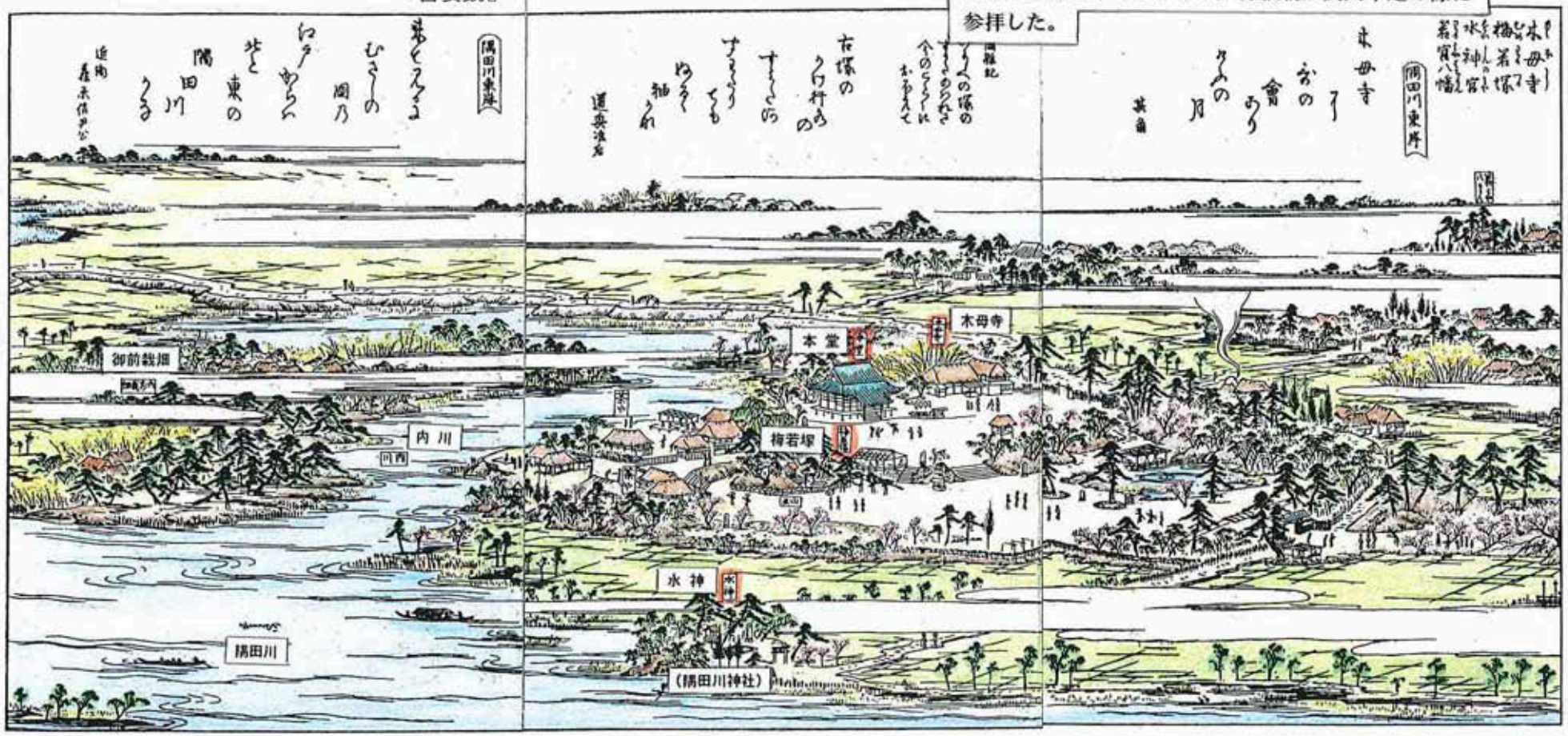


江戸時代の頃の周辺図。御前栽畑跡や御殿跡が書かれている。

木母寺

治承4年（1180）10月2日、頼朝は3万余騎でここを渡り鎌倉に入った。『吾妻鏡』

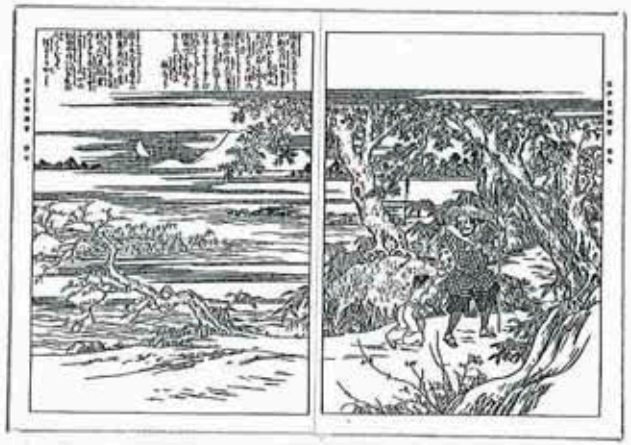
平安時代中期の貞元2年（977）の創建と古い。天台宗。文治5年（1189）源頼朝が奥州平定の際に参拝した。



梅柳山木母寺　隅田村堤のもとにあり。隅田院と號す。天台宗にして、東叡山に屬す。木母は梅の分字ならん。

貞元年間忠圓阿闍梨當寺を草創す。

梅若丸塚　縁起に、梅若丸は山王權現の化現なりと云ふ。



謡曲「隅田川」の梅若丸の話。平安時代中期に梅若丸が人買いにかどわかされている絵。

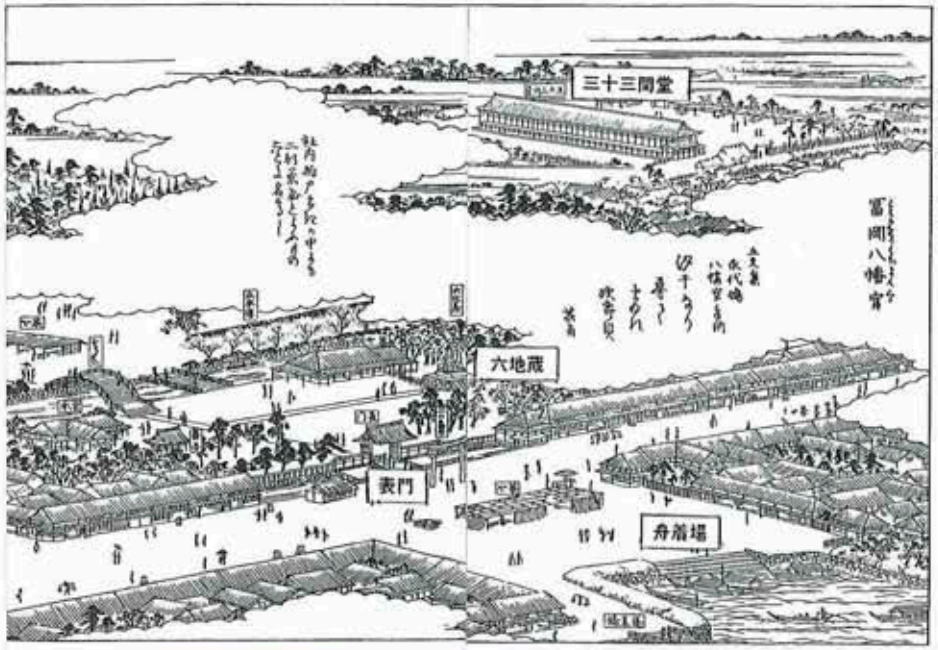
梅若丸追悼の為に建てられた「梅若塚」（梅若山王權現堂）太田道灌が改修したと略誌にはある。

古奥州街道と古東海道の交差点。「隅田宿」の中心地。左右が古奥州街道で上が古東海道。

《江東区》55 富岡八幡宮

江東区富岡 一の二十の三

＝江戸最大の八幡宮で日本一の大みこしがある＝



神社の社報　平成31年

平成３年５月２６日奉納された。この日以来余りの重さでかつがれていない。

神社の資料より

この神輿をかついでいる。

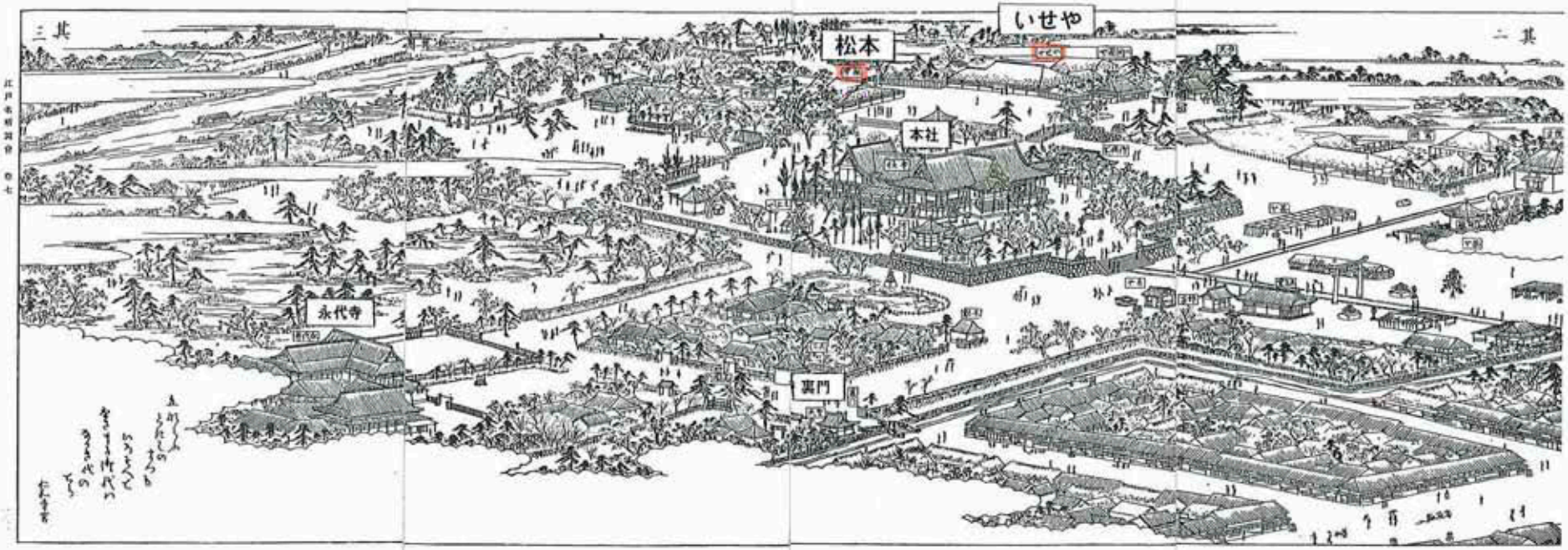
日本一の大神輿。平成３年佐川急便の会長が寄贈。重さ４．５トン、２４ｋｇの純金、多くの宝石がちりばめている。１０億円という。

江東区『観光イラストマップ』

富岡八幡宮

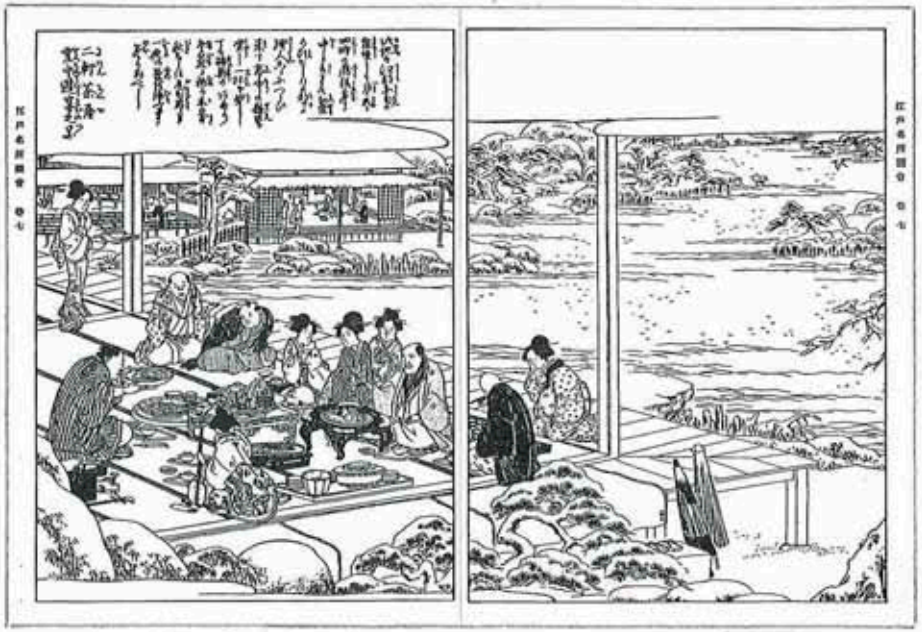
當社門前一華表より内三四町が間は、兩側茶肆・酒肉店軒を並べて、常に絃歌の聲絶えず。殊に社頭には二軒茶屋と稱する貨食屋抔ありて、遊客絶えず、牡蠣・蜆・花蛤・鰻鱺魚の類を此地の名産とせり。

祭神　應神天皇、神影は菅神作。相殿　右　天照大神宮・左　八幡大明神三座。



江戸時代前期の寛永４年（１６２７）今の所に移った。元は下記の南砂の所にあって奈良時代の天平勝宝元年（７４９）京の藤原豊成が下総守として下向した際創祀したという。

二軒茶屋 雪中遊宴之図



二軒茶屋といれる「松本」と「いせや」の二軒の高級料亭があった。これは松本で豪商が冬の景色を楽しんでいる絵。

今當社より十二町ばかり東の方、砂村の海濱に、元八幡宮と稱する宮居あり。當社の舊地といふ。

富岡八幡宮の旧地。ここが発祥の地で、古利根川の河口の砂州島にあった。　江東区南砂７－１４－１８

56 芭蕉庵旧址

江東区常盤 一の三

芭蕉のルーツは、伊賀の豪族柘植氏の一族で桓武平氏の流れの人

『姓氏家系大辞典』

東京写真 2015 松尾芭蕉の像

都内東部を流れる隅田川と、江東区を東西に貫く小名木川の合流点を臨む芭蕉庵史跡展望庭園（江東区常盤1）に、江戸時代の俳人、松尾芭蕉の座像がひっそりとたたずむ。かつて芭蕉が暮らした草庵が付近にあったことから1995年4月に区が庭園とともに整備した。芭蕉が富士山や江戸の街を眺めたであろうこの地で、座像も20年間、変わり続ける東京を見守ってきた。

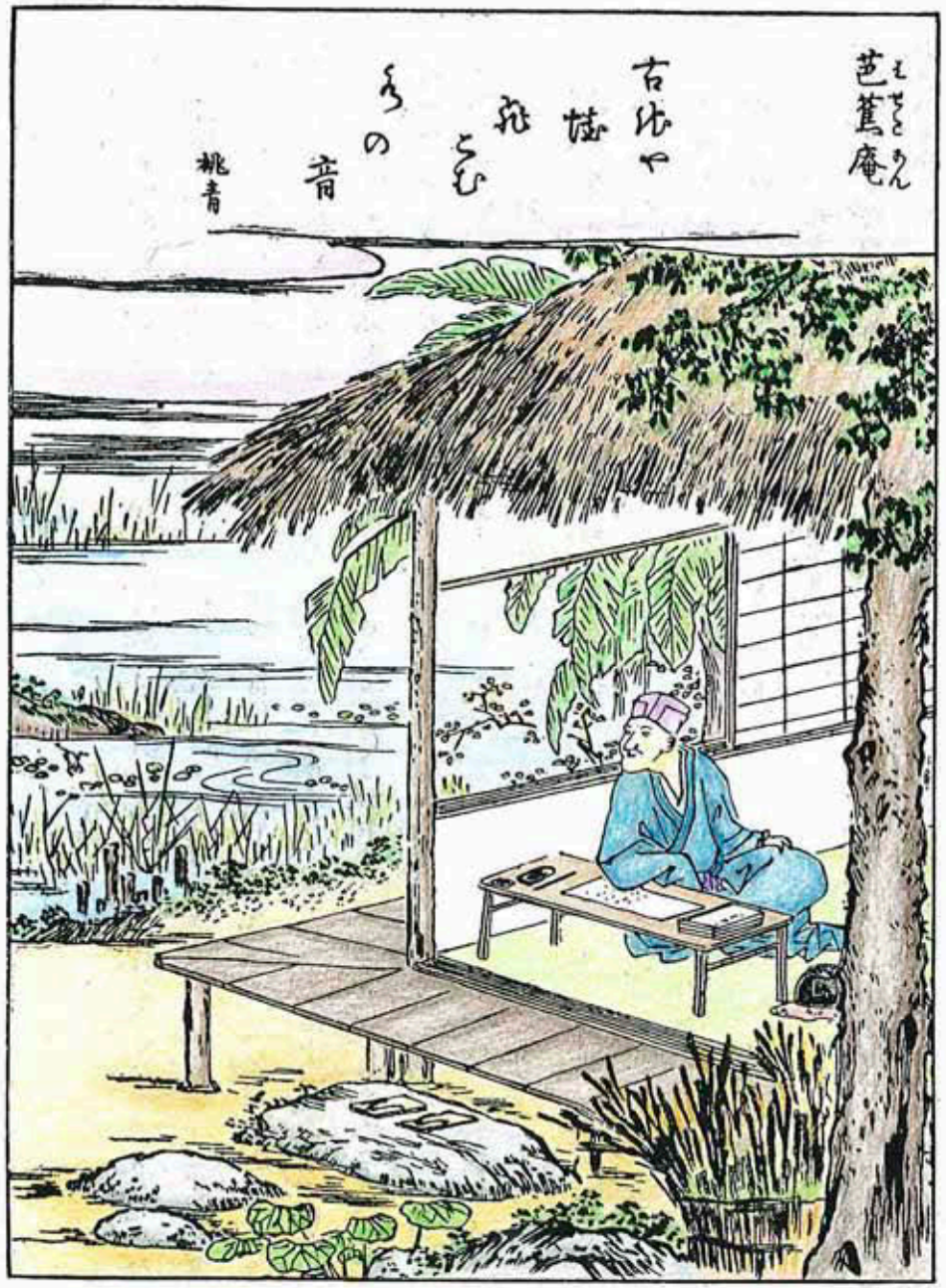
芭蕉の門人、杉山杉風が描いた肖像画を基に制作し、ブロンズ製で座高約1.2メートル。機械仕掛けで、日中は庭園の入り口がある西側を向いて来園者を迎え、閉園後の午後5時に90度回転して南側を向く。川を行き交う観光船からも見えやすいよう、ライトアップされ、午後10時に元の向きに戻る。【川口裕之】

平成15年4月12日　毎日新聞

芭蕉庵史跡展望庭園。平成７年開園で小名木川との合流点にできた展望台。万年橋のそばにある。

芭蕉庵跡の碑。昭和５６年保存会によって設置された。

（正保元年）
芭蕉は、寛永２１年（１６４４）伊賀柘植村の生まれで藤堂氏の臣。寛文１２年（１６７２）２９才の時江戸へ出る。



芭蕉庵舊址　同じ橋の北詰、松平遠州侯の庭中にありて、古池の形今猶存せりといふ。翁は伊賀國上野の產、俗性は松尾氏、宗房といふ。

延宝８年（１６８０）３６才の時深川に住む。元禄２年（１６８９）奥の細道へ出発。同７年（１６９４）５１才でなくなった。

昭和５６年開館した記念館

芭蕉稲荷神社。芭蕉ゆかりの石の蛙を祀った神社。

57 亀戸宰府天満宮

江東区亀戸 三の六の一

『江戸名所花暦』にもある藤と梅の名所

5月上旬の頃は藤まつりで賑わう。

太鼓橋より本殿の方を望む。

地名の由来の「亀ケ井」の碑。

亀戸天神境内　太鼓橋と藤棚

江東区『観光イラストマップ』

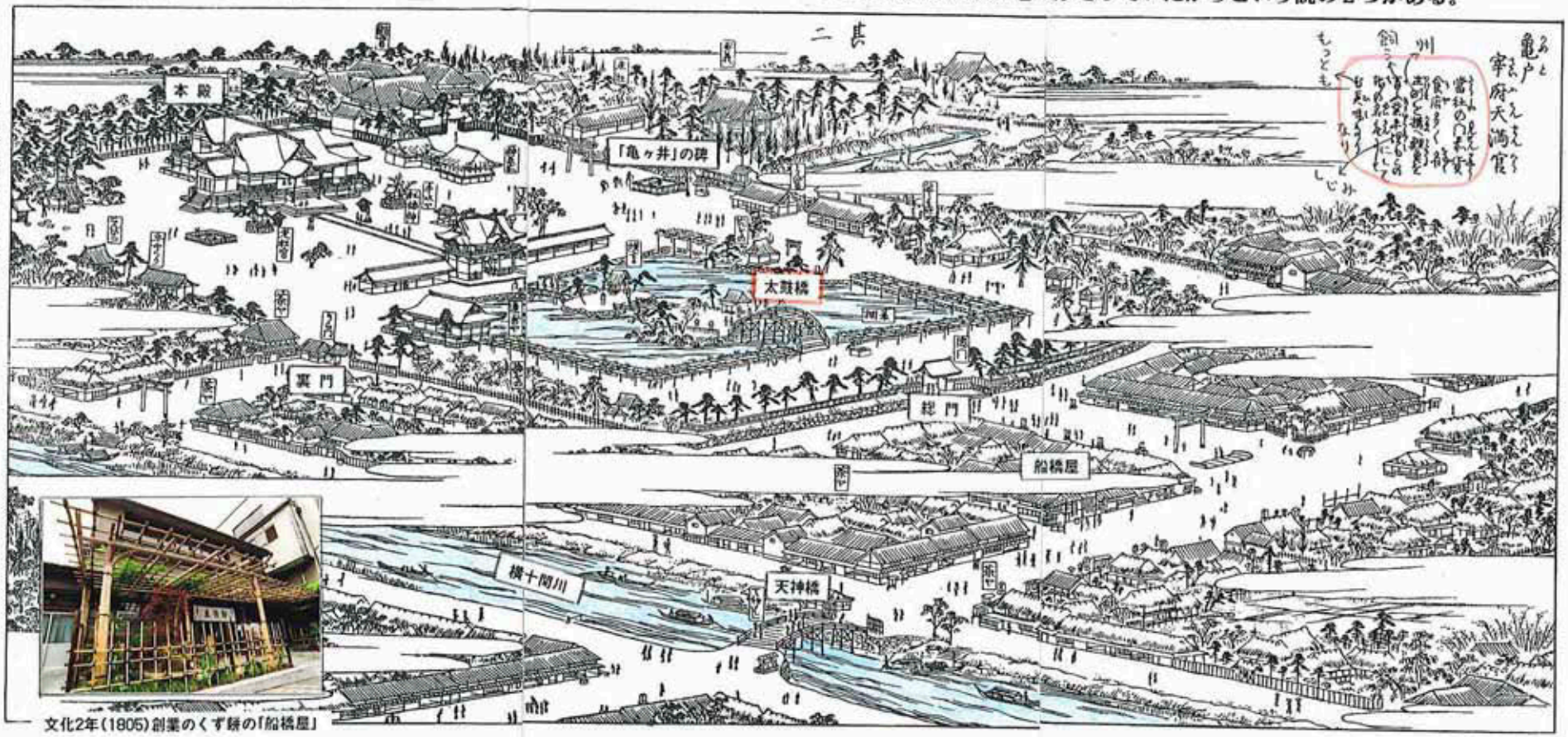
亀戸宰府天満宮

寛文元年（１６６１）創建。菅原道真を祀る。
昭和１１年現在の亀戸天神社の名となった。

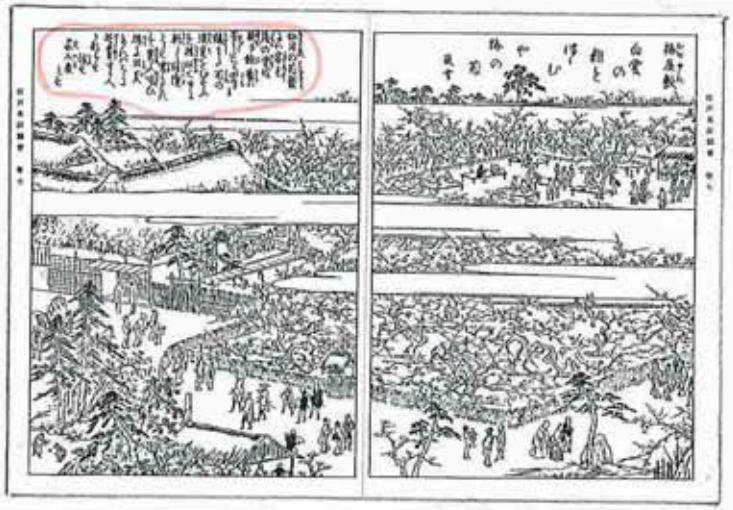
「亀戸」とは、梅屋敷内に「亀ケ井」という井戸があったからという説と昔ここの地の地形が亀の形をしていたからという説の２つがある。

宰府天満宮　龜戸村にあり。故に龜戸天満宮とも唱ふ。

社記に云く、初勧請の地は、今の宮居より東南の方、耕田の中にあり。元宮と稱して、かしこにも菅神の叢祠あり。其後寛文紀元辛丑台命を蒙り、同年壬寅始て今の地を賜ふ。



文化2年（1805）創業のくず餅の「船橋屋」



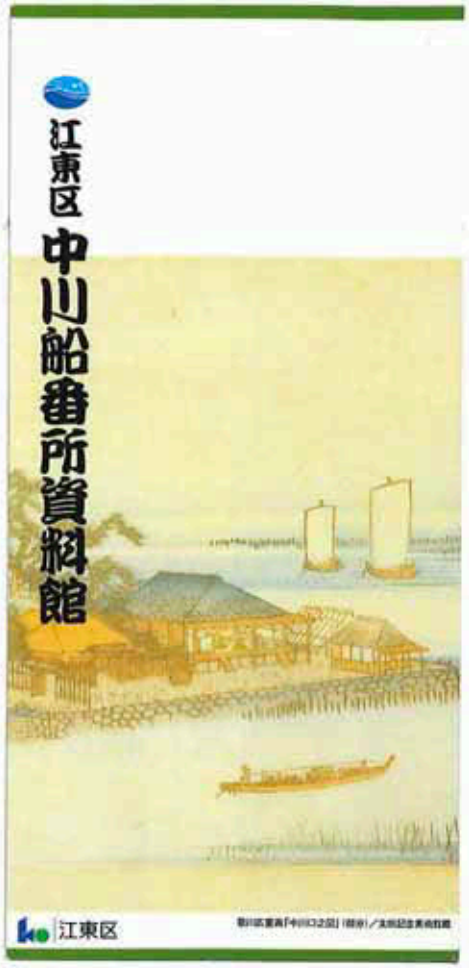
梅屋敷の絵。左上の文には梅が名産だったことが書いてある。

神社の北側にある梅屋敷の跡。明治４２年の水害で廃園となってしまった。

ゴッホが模写した広重の「臥龍梅」の絵

58 中川口（中川船番所）　江東区大島 九の一

＝江戸の町への人や荷物を改める川の関所＝



平成15年に開館した中川船番所資料館

絵と同じ方向から見た写真。向い側に番所があった。

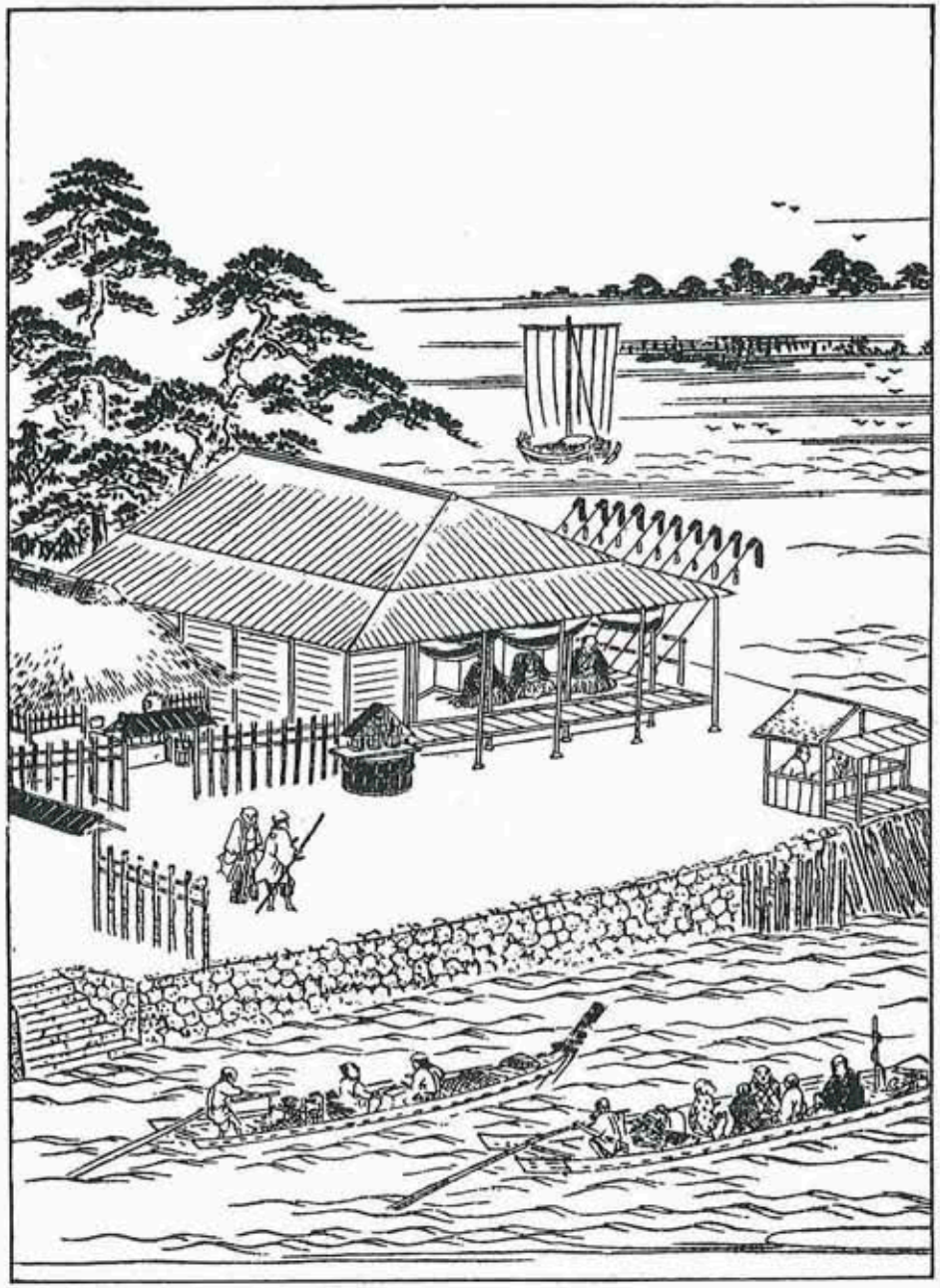
番所のあった所は小公園になっている。

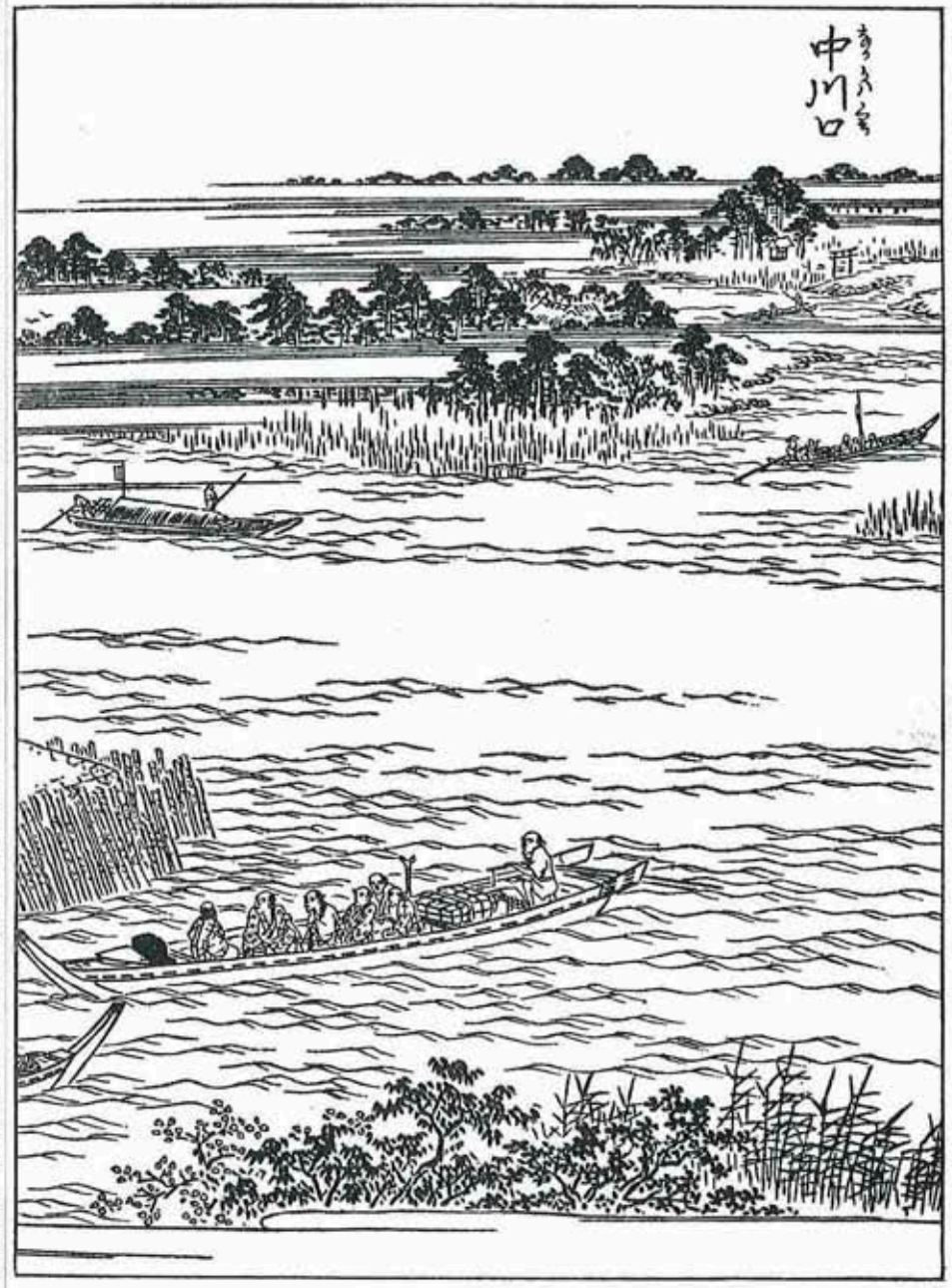
中川船番所

役人が３人船の通行を監視している。

寛文元年（１６６１）深川からここへ移る。手前が江戸初期に行徳の塩を運ぶ為に造られた小名木川で、右が昔の中川。番所は明治２年に廃止された。

中川　隅田川と利根川の間に夾りて流るゝ故に、中川の號ありといへり。





江戸名所圖會　巻七

《品川区》

59 御殿山

＝江戸の桜の名所の一つ＝

品川区北品川 三丁目

御殿山城（ごてんやまじょう）

①品川区北品川四丁目・港区高輪四丁目 ②太田道灌 ③長禄年間（一四五七～六〇） ④平山城 ⑤— ⑥三〇〇m×五〇〇m、標高一〇m、比高一五m ⑦— ⑧— ⑨『新編武蔵国風土記稿』『江戸名所図会』『日本城郭大系』

八ッ山橋陸橋から御殿山を望む。鉄道の為に山が削られた。

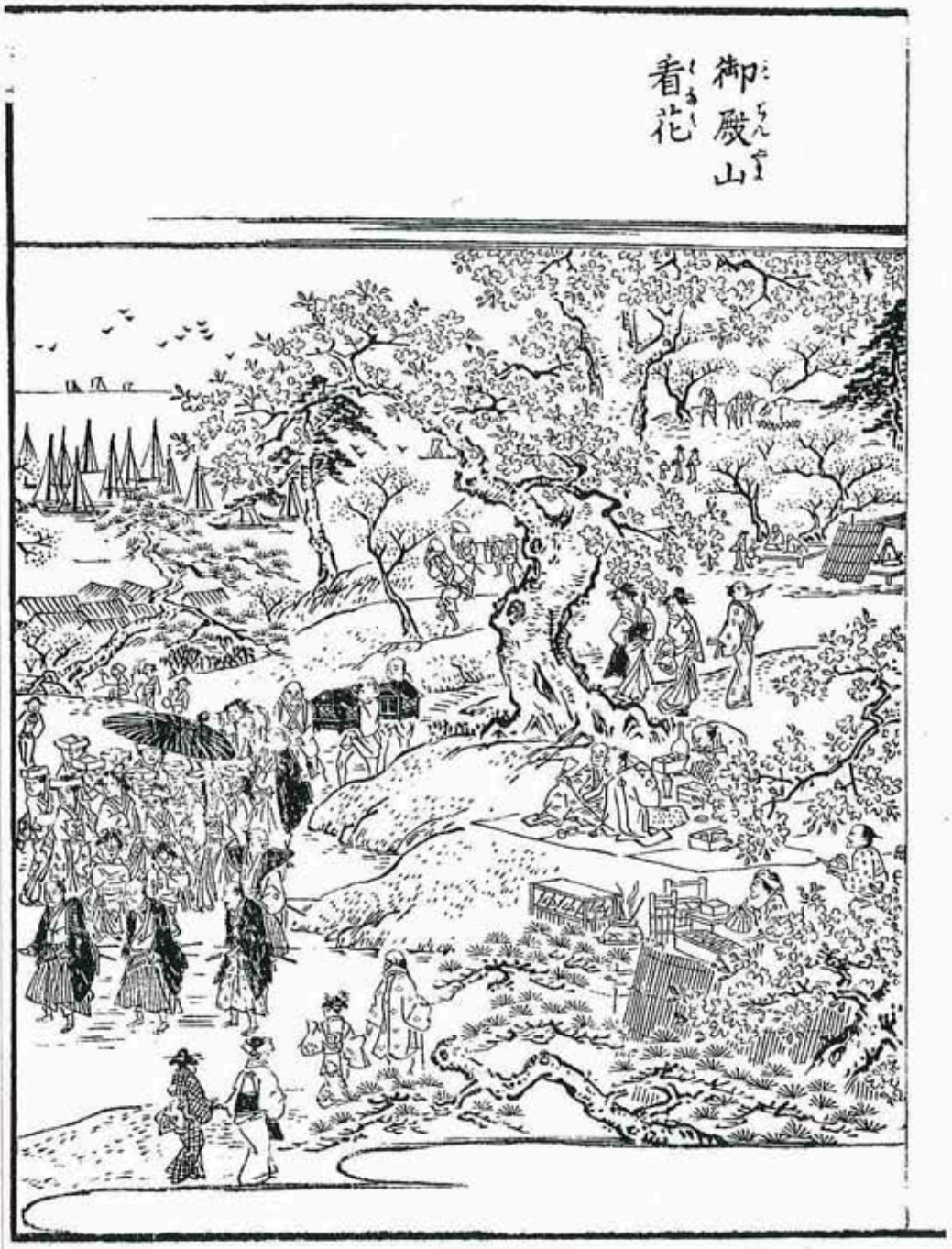
今は品川小学校の裏に権現山公園として残っている。

御殿山の古い木製の説明板

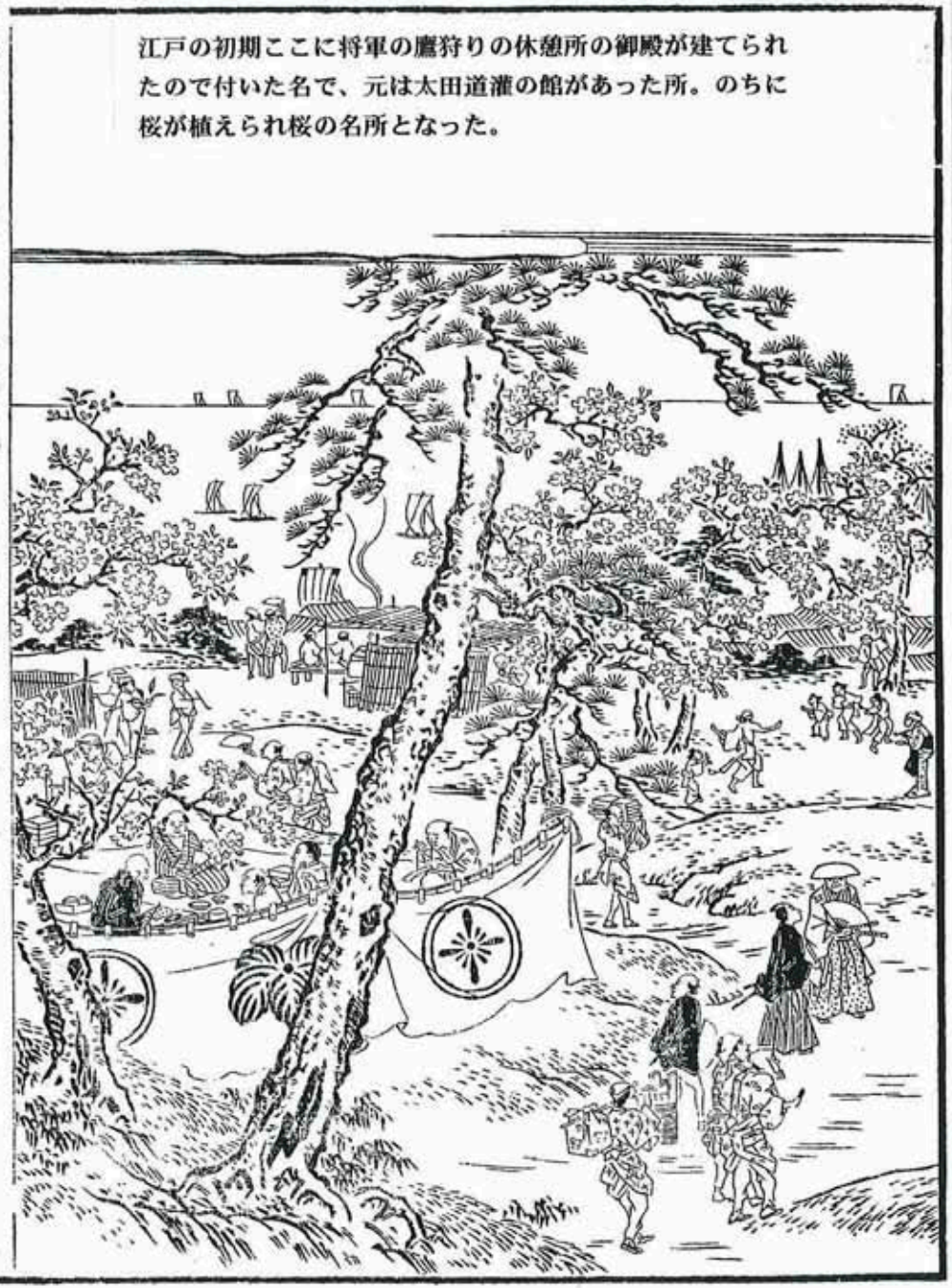
江戸の頃の御殿山の範囲。

御殿山看花（はなみ）

奥女中が家臣を連れてこれから花見をしょうとしている絵。遠くに江戸湾が見える。



江戸の初期ここに将軍の鷹狩りの休憩所の御殿が建てられたので付いた名で、元は太田道灌の館があった所。のちに桜が植えられ桜の名所となった。



御殿山　同所北の山續なり。慶長元和の間、此地に省耕の御殿ありし故に、御殿山の號あり。土人相傳へて、此地を太田道眞居住の舊址なりといふ。此所は海に臨める丘山にして、數千歩の芝生たり。殊更寛文の頃、和州吉野山の櫻の苗を植ゑさせ給ひ、春時爛漫として最壯觀たり。